

中高生が
自分のワガママから
SDGsを考える
実践する

ワガママSDGs

KOBE・KYOTO 2022 REPORT

ワガママの実現、その先には。

ワガママSDGsは中高生が自分事として発見した課題を地域の社会人たちと協働して「試作(プロトタイプ)」するSDGs実証プロジェクトです。

2022年度は神戸・京都で実施。29名の中高生が社会人たちとチームを組み挑戦したプロジェクトで、何が起り、その先に何が見えたのか。



KOBE

“障がい”を“価値”にしない。 カテゴリーで勝負しない商品販売を。

chanced
チーム

こんな《ワガママ》からスタート

障害者やその家族に
先入観を持ってほしくない！

障害者が作るプロダクトを
高校生視点でセレクトして販売。

「障害者が家族にいる、っていうことをカテゴリー化された先入観で見られることにいつもモヤモヤしていた」やぎ、「困っている人に何かしたい」しょうちゃんとなーちゃん、そして「起業に挑戦したい」あきるがタッグを組んだchanced。

「人は知らないと思ってしまう」やぎの経験をもとに、高校生が障害を持つ人たちともしっかりつながれば、障害者がつくった商品を高校生の視点でセレクトして販売することに。

ヒアリング・現地視察から始まり、作業所への連絡、仕入れ、ショップのロゴマーク制作など準備を着々と進め、いよいよ迎えた出店当日。「『障害者が作ってるから買う』じゃなくて『欲しいから買う』と言ってもらいたいよね、ってみんなですっと言ってた。その商

品が良くなったりしていくことに繋げていきかけた。でも当日蓋を開けてみると、お客さんに『障害のある人が作ったんです』って説明している自分たちがいた(あきる)。「見せたい価値と現実の価値が違うという矛盾にぶつかって」(やぎ)。

お客さんには喜んでもらえてたし、商品も売れた。「でもそのお金が次にどれほど繋がるかって考えたら、まだまだ足りない。次に次につけるのはなかなか厳しいんだなって」(なーちゃん)。

4人はすぐに反省会を開いた。「単なる媒介に終わっちゃった。どんな方が作ってるのか、どういう思いで制作に至ったのかを自分たちが知らない」と(やぎ)。「商品自体に魅力を感じてほしい」ということにこだわりすぎたせいで、福祉や支援に繋がるってことを

知らないまま帰っちゃった方も。ちょっとでも何か一言自分の思いを添えられてたら違ったのかも(しょうちゃん)。

このままでは終わりにたくない。前回の反省をもとに、仕入れ先の5つの事業所に取材を申し込み、パンフレットを作成し、京都で再度の出店に臨む。「問題提起だけなら学校の授業でもやるし、こうしていくべきだっていうのは何度も言ってきた。でもそれを実行するのはこんなに大変なんだなって。持続するために必要なお金を稼ぎながらも、自分の理念を貫けるか、手にしたかったことに本当に到達できてるのかをしっかりと見つけ続けることが大事だなって思いました」(やぎ)。



MEMBER

中高生 / あきる(高1)、なーちゃん(高2)、しょうちゃん(高2)、やぎ(高2)
企業・行政サポーター / 佐藤かおり(H2Oリテイリング(株))
コーディネーター / 坂本友里恵

PROCESS

- 9月 支援団体などにヒアリングを重ねる5つの支援団体・事業所へアンケートを実施。判明した課題は「広報と資金」。
- 10月 マルシェにポップアップショップ出店。高校生だからできることを模索。障害者が作るプロダクトを高校生視点でセレクトしてマルシェで販売。
- 12月 反省をもとに再度出店にチャレンジ。“買ってもらうまで終わり”では次に繋がらないと、福祉作業所取材したパンフレットを作成して再度出店に挑戦した。

欲が出てくる



作業所取材して作ったパンフレット。「ただの紹介じゃなくて現場と一緒にみなさんと食事したこととか、自分で感じたことを書きたいなって」(しょうちゃん)





「勉強を軽視していないか？」など探求型学習の現場指導者から厳しいフィードバックを受けつつ作り上げた授業。想定対象者である小学生への実施は叶わなかったが、高校生に模擬授業をおこなった。



探究型学習の先進校・広尾学園を訪問。探究型学習のおもしろさ、実地展開するにあたっての先生目線の試行錯誤などを伺った。

**Learning
革命
チーム**

こんな《ワガママ》からスタート
偏差値教育で役に立たないかも
しれない勉強をするのはイヤ!

小学生向け探求型学習の授業を
設計しプロトタイプング実施

**「なぐりこみ」するはずが。
目指すは授業の商品化。**

当初のチーム名は「なぐりこみ隊」だった。「高校受験を前に、成績向上のために熱中していたテニス可否応なしに中断しなければならなかったのが嫌だった」ゆうき、「中学時代、集団行動やルール遵守を過度に求められて窮屈だった」ひめちゃん、引っ越し先のアメリカの中学で「公式を覚えていないと数学のテストが解けないのは、世界の当たり前ではないんだと知った（公式は黒板に貼り出されており、解を導く過程が採点対象）」ロイをはじめ、たいら、かほ、はかま。6名のメンバーは、偏差値では測りきれない個の才能を引き出す「探求型学習」にフォーカスし、教育現場で探求型学習の浸透を阻む仮想敵に“先生”を設定した。

しかし、敵情視察のヒアリングと探求型学習の現場取材を重ねるなかで、6名ははたと気づく。先生は敵じゃない、かも。「日本の教育が30年も変わらないのは、“変えたくない”人たちがいるからだろうと踏んでいた。少

し調べたら、そういう“情報”もたくさん出てくるし。でも、教育委員会や現場の先生たちの“声”を聞きに行くと、自分が触れてきた“情報”の裏に、教師不足や予算・時間の兼ね合いなど、膨大な事情と試行錯誤があることがわかった」（ロイ）。「文部科学省も『主体的・対話的で深い教育』に舵をきろうとしているけれど、現状は探求型学習の先進校でも、スモールスタートでじわじわと探求型学習の指導者を増やしている段階。学校の先生たちも歯がゆい思いをしながら実践・展開しているんだな」（ゆうき）。

先生と自分たちは同じ方向を見つめている。そんな想いで、チーム名を「Learning 革命」に改めた。

探求型学習のオリジナル授業をプロトタイプングするにあたって、学習対象に選んだのは小学生。「部活や受験勉強に追われる中高生に比べて、小学生は“自由に考える”時間が比較的多い。“勉強の川”に流されて“好きなこと”を諦める中高生にならない

MEMBER

中学生 / ゆうき (高3)、ひめちゃん (高2)、ロイ (高1)、たいら (中1)、かほ (高1)、はかま (高1)
企業・行政サポーター / 土井仁吾 (株) omochi、長谷川翔太 (H2Oリテリング (株))
コーディネーター / 江副 真文

PROCESS

- 8月 “勉強の川”に流されたくない！自身の受験経験や進学・転校で体感した、受け身で詰め込み型の日本の教育。主体的・探求的な学びを妨げているのは……先生？
- 9月 “悪者”がいるわけじゃない。学校の先生や教育委員会、探究型学習の先進校などを取材。見えてきたのは、先生たちも教育方法を転換しようと汗をかいている姿。
- 12月 小学生向け“授業”をプロトタイプング。自分たちにできることを検討し、「好きなこと」というポイントがあれば、“勉強の川”にただ流されず行きたい島に辿りつける」をメッセージにした授業を制作。

してほしいと願って、授業を組み立てた。“好きなこと”が軸にあるからこそ、算数や国語とかの勉強が大切になっていくんだよって伝えたくて。目指しているのは、授業の商品化。まだまだ遠く及ばないけれど、ブラッシュアップを重ねて、機会をもらえたらぜひ小学校で模擬授業したい」（ひめちゃん）。

社会を知る

商品化までまだまだ遠く及ばないけど、ブラッシュアップを重ねていつか実現させたい。

(ひめちゃん・高2) Learning 革命チーム

「失敗を失敗のままで終わらせない」という経験をしたから、もう何でも挑戦しようって思うようになった。

(あん・高1) KAERU チーム

人に任せられるようになったのは自分の中で大きな変化。

(あきる・高1) Chanced チーム



KOBE

●参加中高生 **25** 名
●中高生・地域の大人たちで組まれたチームの数 **5** チーム
↑ 関西 17 名、首都圏 5 名、広島・名古屋・アメリカから各 1 名

KAERU
チーム

こんな《ワガママ》からスタート
不登校の高校生の
心の拠りどころをつくりたい。

中高生の街歩き交流イベント
「マンホールハンター」を実施。

自己との対話

《中高生メンバーのあんにインタビュー》

不登校の高校生が求めることって？ 何回も振り返って、何回も反省して、何回ももがき続けた。

MEMBER

中高生 / あん (高1)
企業・行政サポーター / 内藤翔 (六甲パター
(株))、西田哲也 (H2O リテイリング (株))
コーディネーター / 山下和希

PROCESS

- 9月 企画進まず停滞。
「その場しのぎで先送りでもいい」という自分が救われた言葉を軸に何か企画を、と考えるもなかなか進まず。
- 10月 審査員の指摘で方向転換。
学校説明会を企画したプレゼンで、「やりたいこととやろうとしていることがずれてきていないか」という審査員からの指摘を受け、はっとする。
- 12月 街歩き交流イベント
「マンホールハンター」を企画。
1回目は参加者ゼロで企画を練り直して2回目に再挑戦。中高生なら誰でも繋がる場として開催、交流した。

“不登校”をテーマにするといっても、いろんなアプローチがあって、中間発表の時は、自分のやりたいことがわかっていなかったの、迷って、ぐちゃぐちゃのプレゼンでした。ダメ出しされて当然だと納得して、そこからもう一度、自分のやりたいことを洗い出しました。

大人としっかり関わるのは初めてで、最初は何か否定されないかと緊張していました。これまで大人というと、先生とか親しかいなかったの、心配がまずあって、挑戦しようとしても、安全な方へ1回、道を戻される感じだったので。活動では、無謀な挑戦みたいなことを私

が言っても、「めっちゃ良いやん」って、絶対肯定してくれる。こんな大人がいるんだと思いました。

自分の考えるモヤモヤした抽象と、具体的な形までの間を、大人が対話の中で埋めてくださるのもすごく楽しい経験で、同時に苦しくもありました。まずアイデア、自分のなかの抽象的な考えでも出さないといけない。そのために自分の内面、思い出したくないこと、できない自分とも向き合う必要がありました。本当に何回も振り返って、何回も反省して、何回ももがき続けた感じです。



何種類も作成した案内画像。

「We can change the world (私たちは世界を変えられる)」と言われるけど、あんなのうそだ、頭のいい大学生とかでないと思間は耳を傾けてくれないと思っていました。でも活動を通して、1人の高校生の思考にちゃんと大人が取り合ってくれて、イベントという形になったのはすごい驚きでした。「失敗を失敗のままに終わらせない」という経験をしたから、もう何でも挑戦しようって思うようになったし、視野が広がった気がします。諦めかけていた医学部進学も、案外いけるんじゃないかと思っています。



「マンホールハンター」当日。神戸の街を歩いた。



あん(真ん中)と参加者。

OTO TOTO KYOTO

2022年度は初めて京都でも開催。特定非営利活動法人グローバル人材開発センターの運営のもと、7名の中高生が参加し、5つのプロジェクトを実施。そのうち3つをピックアップ。

FIX
CARBON
プロジェクト

こんな《ワガママ》からスタート
自転車通学で
暑いのがイヤ!

地元の小学生たちと一緒に
海藻を養殖したい。

町役場も漁港も小学校も巻き込んだ
海藻養殖プロジェクトの実現へ挑む。

「小学生の頃から勉強の世界しか知らなかったから一番いい中学校に入って人生勝ったと思ってた」ハッサー。「でもコロナ禍で成績が落ちて、どん底に。そんなとき見た NHK の環境問題の番組で勉強以外の世界があるのかと知って」一人で1年間ゴミ拾い活動した。「自転車通学で暑いのが

嫌で。温暖化を止めるために企業や行政がしてないことってなんだろう?って調べてたら「海藻を植える」にたどり着いて。でも一人では無理だから誰かと一緒にできないかと」参加したワガママSDGsで、たまむんと出会う。「人がやりたいことを行動に移せるシステム作りに興味があった」た

まむん。「考え方も知識も両極」な二人は強力なタッグとなる。

漠然と「海藻を植える」スタートから、効果、方法などを本やネットで調査し、ハッサーの地元でもある和歌山県印南町の海に小学生と海藻を植えるプロジェクトを企画した。実現に向けて、まずは海藻のスペシャリスト、新井章吾氏にコンタクトを取り山口県に。養殖現場を見学し、海藻のことはもちろん、地域でいかに持続可能に活動をしていくか、などたくさんアドバイスをもらった。「『海藻が消滅したのは何らかの原因があるはず。原因も考えず海藻を植えるだけならまた枯れるだけ。植える』じゃなくて『養殖する』プロジェクトに変えなさい』と言われて。そのアドバイスに会ってなかったら僕たちは植えるだけで満足して枯らしていたかも」(ハッサー)。

今は養殖プロジェクトを実現するため、漁港を管轄する町役場、資金提供してくれる企業にアプローチを続けている。「だけど簡単には返答は来ない。待っても仕方ないから二人で相談して、共感者が見つかるかもしれない可能性をかけて、作文コンテストにも応募するつもり」(たまむん)。



メンバーのハッサーとたまむん。海藻のスペシャリストに現場を見せてもらうため、山口県へ。

反スクール法
チーム

こんな《ワガママ》からスタート

理不尽なルールや制服で
押しさえつけられたくない！

偽制服でのオリジナル
文化祭を開催。

「全て変える」のは
難しくとも、偽制服なら。



MEMBER

中高生 /
なな(高2)、やまちゃん
(高2)、もね(高2)、な
ぎさ(高2)、あすか(高2)
企業・行政サポーター
/ 松浦大介(株)日立シ
ステム生産技術本部、 俵
健二(H2Oリテイリング(株))
コーディネーター /
大福聡平

PROCESS

8月 制服や校則への違和感を語り合う
全国の校則を調査。「もし変えられるんだったら」で盛り上がる。

10月 偽制服での文化祭を企画
アンケートも実施。「自分たちが着たいと思える制服を着たオリジナル文化祭」を開催することになった。

12月 オリジナル文化祭で討論
「校則や制服にも意味がある」「制服のメリットも見えてきた」という意見も。違和感のある校則について各自で先生に尋ねることに。

「うちの学校は校則が厳しくて制服もダサい。それが定員割れにつながるくらい。だったら、かわいい制服にしたらみんなも学校生活を楽しめるんじゃないかって思って参加しました」と話すのは、チームのリーダー的役割を担ったなぎさ。「もし変えられたらってチームで話すのは楽しかった」という。でも、結局、各自の学校で校則や制服を変えようという活動にはいかなか

た。「理解のある先生と行動力のある生徒がいない」とできない。制服のメリットもあるし、無くしたいわけじゃないし。変えるのが必要とは思うけれど。不満はあるけど、自分たちで変えるほどじゃない。そんな想いで彼女たちが行き着いたのは「かわいい偽制服を好きなように着て集まること」。

身の丈で実現

学校の授業で問題提起はし続けてきた。

でもそれを“実行する”のは、
こんなに大変なんやなって。

(やぎ・高2) Chanced チーム

“支援する”って

自分が何ができるかを
ちゃんと考えてないと

結局何もできないことがわかった。

(なーちゃん・高2) Chanced チーム

意識を周りに向けたら、

LGBTQのことを

考えている人たちはいる

って気づいた。

(ななみん・高1) Shining Rainbow チーム



**Shining
Rainbow**
チーム

こんな《ワガママ》からスタート

好きなものを
好きっていいたい！

LGBTQの支援者を増やすために
フォトコンテストを実施。

フォトコン、賞金をつけるべき？

りょーや：数を集めるなら賞金をつけるのが一番だと思っていたけど、賞金目当ての人を集めたいわけじゃないって気がついた。
ゆら：フォトコンを話題にすることで、興味持ってくれるひととつながれたのはある。

MEMBER

中高生 / ゆら(高1)、さくら(高1)、ななみん(高1)、かりちゃん(中1)、りょーや(高1)、せいか(高2)
企業・行政サポーター / 高橋諒(H2Oリテイリング(株))
コーディネーター / 高山秋帆

LGBTQの本当の課題は周囲にあるのかも。
《迷走》しながら生まれた発見、つながり。

迷走 3

Shining Rainbow
Instagramはこちら>



8月

ヒアリングしてみたら
意外と高かった認知度。

LGBTQへの理解を深めたい！とスタート。しかし、アンケートや当事者へのインタビューを通して、LGBTQの認知度は意外と高いことを知る。

9月

思いついては消える、
たくさんアイデア。

アライ(LGBTQの支援者)を増やすアプローチへ。でも何をしたら？ SNS 発信、CM制作、地元の名産品とのコラボ……。アイデアはたくさん出るも、「これじゃない」と迷走を重ねる。

12月

コンテスト実施するも
応募ゼロ。

「アライポーズ」をチームで発案。ポーズを広めるためにInstagram上でフォトコンテストを実施することに。だけど初期は応募0。やり方を見直すことに。

12月

最終投稿 40 件。
表彰式実施



迷走 1

誰とチームを組むのか。このチームに決まるまで。
せいか：偏見や差別に対する無意識の恐怖が。でも、ここなら自分の違和感を話せると思って戻ってきた。
りょーや：入っていたチームで、意見が合わなくて出るようになった。でもそれがあったから、誰かの意見をまずは受け止めようと思った。

迷走 2

自分たち自身が決めつけてた。
さくら：当事者の方にヒアリングの際、「不便なことは？」から聞いたら「ネガティブな前提で質問するのは失礼」と言われて。不快な思いをさせてしまったんです。
かりちゃん：決めつけや無意識の差別はだめだなって。言葉に繊細になった。

迷走する

Policy Proposals

そして、社会へ。

神戸市の施策に反映してほしい内容を市長に。

プロトタイプングという仮説検証を通じてわかった本当の社会課題や、有効な解決の方向性を、地域づくり・社会づくりにつなげていきたい。そこで、神戸市長への提言を作成。政策提言の専門家として中高生たちにアドバイスをしてくれた小木曾稔氏（株式会社政策渉外ドゥタンク・クロスボーダー代表取締役）によるコメントとともにその内容をピックアップ。

神戸市と動画作成・大型ビジョンでの放映の提案

**LGBTQの周りの人たちの認識が重要。
Ally（支援者）を増やす取り組みを。**

Shining Rainbow チーム

小木曾氏コメント

実証実験の結果を「情報の信頼性・拡散力の不足」として総括し、当事者以外の人は日々の生活の中で何をしたいのかということに焦点をあてている。

小木曾氏コメント

障がい者との共生自体はよく言われるが、高校生の視点からどう関与できるかという自分事としての提案である。

高校生が障がい者福祉と出会う機会の提案

**10代が福祉の業界と関わる機会がそもそも少ない。
高校生が商品開発から関われる仕組みを。**

Chanced チーム

探求型授業実施の提案

**先生方が探求型の授業をできるようなサポートが必要。
教師や生徒、みんなが主体となるような
オリジナルの探求型授業の実施を。**

Learning 革命チーム

小木曾氏コメント

学生の視点で授業内容をつくり実施してみたことやその結果を踏まえて自ら授業をしてみたいという提案は極めて稀有なものである。

小木曾氏コメント

経験から不登校の人がどこもつながっていないこと、フリースクールだけでも受け止めきれっていないことを実感して、その受け皿を作る提案に。

不登校当事者の居場所づくりの提案

**回復しはじめている不登校当事者が踏み出す先がない。
不登校の当事者の声を集めて居場所づくりを。**

KAERU チーム



宮崎県の都農ワインを訪問。

都農ワイン
アロマ
プロジェクト

こんな《ワガママ》からスタート
大好きな都農町
を幸せにしたい！

都農町の魅力を広めるための
地元ワインを使った
サウナ用アロマを開発

都農町、京都、そしてサウナ。 自分の好きなことをアロマで繋げたい。

高校の研修で行った、宮崎県都農町。「出会った地元の方々に惚れた」から、「過疎化の問題を聞いてなにかしたいとそればかり考えてました」というれれん。「京都の若者にもまずは都農町のことを知って欲しい」と自分にしかできないことを探った。サウナが好きなられれんがたどり着いたのは、都農町の特産物ワインを使ったサウナで楽しめるアロマを開発すること。「サウナって恋愛話が盛り上がるんです。だから恋愛話をしながらワインのアロマを楽しめたら都農町のことも広められるかもって」。

といっても企画はなかなか進まなかった。「学校のプレゼンとか“評価”がある。それってある意味ゴールがあつて。でもワガママSDGsは誰から

も評価されないし、僕の考えに賛同してもらえないといけなかったりするから、今まで自分がやってきたみたいに情熱だけで突っ走ってどうにかなるもんでもなかったり。好きなことしてるだけなのに自分の弱点を見つめなきゃいけないし正直逃げ出しそうになった」。そこから「周りの大人の支援やフィードバックをもらって」3月には都農町を訪れ、都農ワインのみなさんにアロマの企画もプレゼン。学校の理科室で実験したり試行錯誤する日々が続いている。

「自分からやりたいって言ったことだからここまでやれたっていうのは大きいかも。自分しかこんなこと考えないだろうし、しないだろうし、自分がやるしかない」と。

自分らしき
プロジェクト

こんな《ワガママ》からスタート
自分らしくいたい！

学校で自分らしく過ごすための
校則や生徒主体の学校づくりを
通学する学校に提案

「校則じゃない、 社会が変わらなきゃいけないんだって」

「学校で“自分らしくいたい”って思っても校則が規制してしまう。でもこういうものなのかなって諦めてたけど、こんなチャンスをもたらえたから」と一人でプロジェクトを立ち上げた、みう。海外の校則まで調べるところからスタートし、学校に直接交渉。イベントで生徒を前にプレゼンする機会ももらえた。だけどだんだん見えてきたのは「社会

がこうだから校則がこうなってるんだって」。今は自分の学校の校則だけが変れば良いとは思っていない。「社会を変えないと。どこまで自分にできるかはわからないけど、まずは周りの人に社会がおかしいって知ってもらうことからスタートかな。自分もそうだったように諦めてる人たちにも『行動に移せるんだ』って気づいてもらうためにも」。

ワガママSDGsとは

中学生と社会人が、いま・ここから社会を変えていく、実践型の学び。

中学生が自分のワガママから社会の問題を発見し、さまざまな社会人と共に解決に取り組む実践型プログラムです。

未来をつくる次世代が自ら問いを立て、
現在をつくる社会人と一緒に実際に社会を変えていく経験を通して、
自分の未来を変えつつ、社会変革の力も身につけます。



2022 年度神戸プログラム

2022 年度神戸プログラムに関わった人たち

中高生たちを地域の社会人たちがよってたかって支援しました。

STEP 1 教育プログラム

- 5月 キックオフ
 - 座学(オンライン、週1回 90分)
 - ・コミュニケーションデザイン
 - ・企画
 - ・編集

協働の基本を学びつつ
各個人が違和感を見つめ直し
自分の「ワガママ」を言語化。
- 6月 交流会
 - @デザイン・クリエイティブセンター
神戸KIITO

各々の「ワガママ」をもとに
チームを結成。
- 7月 チームごとに企画・リサーチ
- 8月 合宿 @しあわせの村

STEP 2 協働プロジェクト

- 9月 中間発表会
 - チームごとに
プロトタイプングに挑戦。
- 12月 最終成果発表会
 - これまでのプロセスと今後の展望を
発表。最後にはそれぞれの
“ネクスト・ワガママ”も発表
- 3月 神戸市長への提言を作成
 - プログラム終了後も任意で
各プロジェクト進行中

プログラム審査員

吉田幸司
株式会社自然エネルギー市民
ファンド代表取締役・弁護士
「ワガママはそれぞれ違うと思う。
一人でも行動する勇気を持って
これからも進んでほしい」

西口一希
Strategy Partners
代表取締役社長
「誰かを喜ばすことで生きていく価値が
できる。失敗上等、未成年だからこそ
やってみる」

小木曾稔
株式会社政策渉外ドゥタンク・
クロスボーダー 代表取締役
「常に自分事にする機会をうまく捉
えようと SDGs に貢献できるはず。
今後考えるきっかけになれば」

黒田浄治
六甲バター株式会社
執行役員 マーケティング
本部長
「世の中の誰かのために一所懸命
考えて特性を活かして実践する。
この経験を今後も活かしてほしい」

福井 誠
武庫川女子大学経営学部
経営学部長
「これからは、中高生でも自ら問
いを立てられる力が求められる」

神谷圭市
日本財団 経営企画広報部 ソーシ
アルイノベーション推進チームリーダー
「自分ではどうにもできないことも
共感を得られたら糸口になること
も。どうやったら共感をえられるか
をこれからも意識してみてください」

教育プログラムでの講師

湯川カナ 【企画】
【ワガママ SDGs 代表】
(一社)リベルタ学舎 代表、な
りわいカンパニー(株)代表、
関西ベンチャー学会理事
「誰にも頼まれていないのにやる。しかも
やっても学校の成績には評価されない。
だから自分がやってきたことの価値を自
分が決める。それがワガママ SDGs」

中谷和代
【コミュニケーションデザイン】
渡邊裕史 演出家・
劇作家
「コミュニケーションってうまい・へた、とか、
正解・不正解で考えてしまうこともあるけ
れど、違う角度でものごとを見るのも重要」

有田佳浩 【編集】
編集者・コベルクスデザイン代
表・兵庫県広報プロデューサー
「答えを出すのではなく、思考
していくことが何よりも大事」

土井仁吾
(株) omochi
「ワガママは行動を続けて
いくことで、みんなが求め
るワガママに変化していくと
思います」

長谷川翔太
H2O リテイリング(株)
経営企画室
「“やりたいことをやり切る”
難しさや面白さを実感できる
機会はあまりありません。こ
れからも納得するまで突き進
んでください」

中高生とチームを形成したサポーター

西田哲也
H2O リテイリング(株) 経営企
画室 サステナビリティ推進部
「世代を超えて、時間を超えて
一緒に社会を変えていきたい、
そう強く思いました」

松浦大介
(株) 日立システムズ
生産技術本部
「自分や誰かのために、愛のままにワ
ガママに、行けるところまで行けたら
いいなと思う」

内藤翔
六甲バター株式会社 マーケティング部
「何度も壁にぶつかりながら悩み、
考え、成長し続けたメンバーの姿
にいつも驚かされました」

依健二
H2O リテイリング(株) 経営企画室
「自分がどう感じるか、どうしたい
のか、ワガママこそ社会を変える
エネルギーの源泉だと思います」

佐藤かおり
H2O リテイリング(株)
カード政策担当 部長
「意識が高く、且つチームプレイも早くに作れ
て(おそらく自然に)その柔軟さに驚きました!
Z世代より更に若いメンバーがこんなにいる
なんて、日本の未来は明るい!」

高橋諒
H2O リテイリング(株) 経営企画室
「ワガママが持つエネルギーで
きつと社会は変えられるんだと感
じました。私ももっとワガママに
仕事したいと思います!」

大福聡平
(一社) みくもや 代表理事、
(特非) 学習創造フォーラム
事務局長
「中高生のワガママ
を元に、関わった人達が一緒
に本気で社会を変えようとする、
そのプロセスがおもしろい」

唐津周平
ワガママ SDGs PM、神戸学
院大学経済学部非常勤講師
「自分の違和感から
企画をつくるって難しいけど面白い。
大人向けのワガママ SDGs
もありではないでしょうか」

坂本友里恵
神戸市まちづくり専門家/商店街・
市場応援隊/(一社)SAZARE 理事
「大人のエゴは置いておいて…とにかく中高
生のワガママ(想い)に、とことん寄り添って、
大人が振り回されるくらいがちょうどいい!」

高山秋帆
NPO 法人コミュニテ
ィリンク、フェミニスト
「“ジブンゴトが社会に広がる”を
たくさん体験できる場所。参加し
てくれたみんなが、少しでもそう
感じてくれたらいいな」

江副真文
(一社)SAZARE 代表、認定
NPO 法人全国こども食堂支
援センター・むすびえ
「“我(わ)が儘(まま)”という言葉
の意味を改めて考えさせられる、とっ
ても良いプログラムだと思っています」

山下和希
(株)神戸デザインセン
ターディレクター・認定 NPO 法
人まなびと理事
「思いっきり失敗できる
環境にこそたくさんの学
びが詰まっていると改
めて感じる時間でした」

坪田卓巳
Re Cura Inc. 代表、
神戸市協働コー
ディネーター、(株)
いきいきライブ阪急
阪神 他
「挑戦と創造の場をみんな
でつくってるなあと改めて今
年も感じました」

協力(2021年度卒業生)

まーちゃん ジャクス ゆう

事務局

加藤伸一 総務、経理 桂知秋 広報 松本幸 ライター 橋本莉緒 ライター 川本まい カメラマン 福島由衣 デザイナー 清水未生 デザイナー

企業・行政サポーター
コーディネーター

協力 **助成**

主催 一般社団法人リベルタ学舎 神戸市中央区江戸町100番601
TEL : 078-599-9381 Email : jibun@lgaku.com